

第5学年1組 国語科学習指導案（修正案）

公開授業Ⅱ 場所 附中体育館 指導者 溝上 剛道

1 単元名 すぐれた表現に着目して読み、『ろばたの座談会』を開こう（「大造じいさんとガン」光村図書5年）

子どもたちは「読書と私」という大単元の中で、多様な文種の作品に出会い、自分にとっての読書のたのしみ方や意味を広げ深めてきた。特に、前単元（学習材「たずねびと」）では「物語の全体像」という新たな文学のたのしみ方を見いだすことができたが、一方で情景描写等の表現の工夫に着目し、解釈を深めることができた子どもは一部に限られていた。そこで、本単元では場面展開や描写が魅力的な「大造じいさんとガン」を学習材として取り上げる。単元を通して「何が書かれているか」（内容面）と「どのように書かれているか」（表現面）の両面から物語を読む面白さや意味を見だし、読書生活をより豊かにして行ってほしいと願う。

そのために、今回は『ろばたの座談会』という言語活動を中心に、表現と理解を行き来しながら個々の問いを追究していく単元を構想した。特に、個々の問題意識や困り感に応じて言語活動の取り組み方を選択できるようにすることで、一人一人が自己の現状をメタ的に捉えながら、言葉に立ち止まり、自分なりの意味の創造へと向かっていく学びを生み出していく。

2 単元について

(1) 本単元は、「大造じいさんとガン」を中心学習材とし、話の構成・展開や表現の工夫などに着目して、自分の考えをまとめる力の育成をねらう。

本学習材は、「前書き」の存在によって語りの構造をもつ作品となっている。全体構成としては、反復的な構造（類比の関係）をもちつつ、物語の空所と、展開の変化・発展（対比の関係）によって、大造じいさんの残雪に対する思いや見方、そしてその変容が浮かび上がってくる。また、大造じいさんの心情の変化と響き合う情景描写や色彩語なども魅力の一つである。

『ろばたの座談会』は、語りの構造を生かした登場人物・語り手との応答形式の活動である。先行実践も多数あるが、それは「読者としての問いとその解決」と「インタビューとその答え」の親和性が高いからだろう。一方、ともすると問いと答えの列挙になりがちで解釈が深まらないという課題もある。そこで本実践では、次の3点をポイントとして言語活動をデザインする。

- 「前書き」を生かして、大造じいさんと「わたし（＝語り手）」とのやり取りに「私（＝読者としての自分）」を加えた座談会にする。
- 「問い」だけでなく、[自分の予想]もセットで問いかけるようにすることで、個々の解釈を大造じいさんや語り手の立場から吟味する必然性をつくる。
- 「座談会録」としてまとめる活動を設定し、自分からの[問いかけ]か、大造や語り手の[返答]かを選んで記述できるようにすることで、自己の学習状況をメタ的に捉えやすくする。
- 座談会は、自分から大造じいさん・語り手への[最後の一言]で締め括る。

(2) 子どもたちは、これまで大単元「読書と私」の中で、伝記や論説文等、多様な文種の作品に出会い、自分にとっての読書のたのしみ方や意味を広げ深めてきた。特に、文学的文章については、前単元において、物語の全体像を捉えるという新たな文学のたのしみ方を見いだしている。さらに、本単元で内容面・表現面の両面から自分の考えを形成する学習に取り組むことは、第6学年において、より暗示性の高い文章を基に、内容面・表現面の両面から自分の考えをまとめることへとつながっていく。

(3) 本単元に関する子どもの実態は次の通りである。(調査人数36人)

- ① ほとんどの子どもが、初読の段階で物語の内容の大体(誰が、どうして、どうなったか)を捉えることができるが、2名ほど支援が必要な子どもがいる。
- ② 全員が行動の理由や心情についての問いを立てることができる。しかし、表現面に着目した問いを立てたり、心情を読む手掛かりとして情景等の描写に目を向けたりしながら、物語の全体像を捉えることができる子どもは3分の1程度である。

3 単元の目標

- (1) 話の構成や展開について理解したり、表現の工夫に気付いたりすることができる。
- (2) 話の構成・展開や表現の工夫などに着目して、自分の考えをまとめることができる。
- (3) 行動描写や情景描写、暗示的な表現等のよさを認識して考えを伝え合おうとするとともに、学んだことを進んで読書生活に生かそうとする。

4 指導計画(8時間取り扱い)

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法等
事前	0 これまでの読書を振り返り、動物と人との交流を描いた作品に親しむ。	○「伝記 椋鳩十」の紹介から、動物と人との交流を描いた作品の読書サークルを始めておく。	
1 ┌ 3	1 単元の見通しをもつ。 (1) あらすじを捉え、感想を交流する。 (2) どんな活動に取り組みたいかを話し合う。 (3) 試しの活動に取り組み、問いを立てる。	○ 活動アイデアとしては劇や続き話等が出ると予想される。それらの良さを確かめながら、子どもと共に活動デザインを決めていく。 ○ 試しの活動と振り返りの場を設け、現状をモニタリングしながら問いを立てられるようにする。	【思】話の構成・展開や表現の工夫に着目して、自分の考えをまとめている。(試しの活動)
4 ┌ 7	2 問いの解決に取り組む。 (1) 各自で解決する。 (2) 解決できたこと・できなかったことを全体で相談する。 (3)『座談会録』を書く。 ※(1)~(3)は、一方的な学習過程ではなく、必要に応じて行き来しながら進める。	○ 各自での解決の際には、活動の取り組み方を自己選択できるようにする。以下はその例である。 ・大造、語り手、自分の三役で実際に『ろばたの座談会』をする。 ・問いの解決に関わる場面の即興劇やペープサート劇をする。 ・似た問いの人と話し合う。等 ○「振り返り一歩手前」の手立てとして、『座談会録』のどこを書くか([自分の予想]か[大造・語り手の返答]か)を選ばせる。 ○ 全体の場では、問いに対する[自分の予想]でずれが生じているところを取り上げ、それぞれが関連付けている場面や叙述を明らかにしていく。(本時6/8)	【知】話の構成や展開について理解したり、表現の工夫に気付いたりしている。(ノート) 【思】話の構成・展開や表現の工夫などに着目して、自分の考えをまとめている。(座談会録) 【主】粘り強く問いの解決に取り組み、自己の学習を調整しながら考えをまとめようとしている。(観察・国語日記)
8	3 単元の学習を振り返り、読書生活に生かしたいことを考える。	○ 着目した言葉や読み方・考え方を「学びの足跡」に整理し、今後の読書サークルの指標になるようにする。	【主】単元の学びを日常の読書生活に生かそうとしている。(振り返り)

5 本時の学習

(1) 目標

自分が選んだ方法で問いを解決したり、考えを[問いかけ・返答]にまとめたりする活動を通して、自分の問いを発展させたり、解決の見通しを立て直したりすることができる。

(2) 展開

時間	学習活動	子どもの思い・姿
15	1 前時に解決した問いを振り返りながら、座談会の見通しをもつ。(全体)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 僕は前回、座談会録で問いかけをこんなふうにかき加えたから、そこを解決したいな。 ○ 僕は、おとりを使うのは卑怯だと思う。正々堂々戦うなら、銃だけで戦わないと。 ○ だったら、うナギつりばり作戦やタニシまきえ作戦もひきょうってことになるよ。 ○ ぼくはハヤブサと戦っている時や傷を負った残雪を撃つのは卑怯だと思うけど、これまでの作戦は狩人なんだから別に卑怯ではないんじゃないかな。 ○ 大造じいさんが「ひきょうなやり方でやっつけたかあない」って言っているのは、そのことなんじゃないかな。 ○ 僕はわなを使うのは卑怯って思っていたけど、誰目線で考えるかによって、「そもそもひきょうとは」が変わってくるんだね。 ○ そんなふうに、「視点を変えてみる」というのは、解決策として使えそうだよ。
15	2 座談会をする。(少人数グループ)	<ul style="list-style-type: none"> ○ よし。これまで見つけてきた解決策を使って座談会をしてみよう。 ○ さっきの「ひきょうなやり方」については視点を変えてみることで、大造じいさんが何をひきょうと考えているかはわかってきたね。 ○ これまで考えていた「なぜじゅうをおろしたのか」とも繋がりそう。あの場面で心を打たれたから、大造さんの中に優しさが出てきたんだと思う。 ○ 優しさとは違う気がして、僕は狩人としてのプライドがあったと思う。そのプライドを揺さぶられるくらい残雪の姿がすごかったんだよ。
15	3 [問いかけ・返答・最後の一言]のいずれかを選んで考えをまとめ、本時の学習を振り返る。(個人)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 私は、みんなと話し合って、逆にまた迷ってきたから、そのことを[問いかけ]を書き足して次の時間にもう一度解決してみようと思う。 ○ 僕は、大造じいさんの[返答]に書こうかな。大造じいさんが何を卑怯とって、最後のあの言葉を言ったかが書けそうな気がするよ。 ○ 今日は、新しい解決策を使ってみたけど、前の解決策と合わせて使うと問いが解決できました。



本時は、全員で一つの問いを解決するのではなく、一人一人が[最後の一言]をより深めていくために、各自の問いの解決に取り組んでいきます。その中で、個々の問いの解決と言語活動の再考を活性化させるには、どんな協働の場が有効なのか、子どもの姿を通して提案します。

主体的・対話的で深い学びを生み出す教師の支援（発問・指示・教具・評価）

- 前時までの『座談会録』に対する納得度（自己評価）とその理由を振り返る場を設ける。その際、「どんな問いを、どうやって解決しようとしたからその納得度か」を問い、一人一人が自分の問いとその解決プロセスを想起できるようにする。
- 納得度が低い子どもに多い「大造じいさんはひきょうなのか、ひきょうではないのか」という問いを取り上げ、それぞれの考えを語る場を設けることで、ずれを顕在化させていく。
- 前時には「場面に分けて考える」「そもそも思考で考える」という二つの解決策が子どもたちから出てきている。この解決策を用いた考えが出てきた際には、まず、場面ごとの大造じいさんの行動、作戦に焦点化していきながら、個々の考えを表出させていく。（＝分けて考える）それにより、「だったら〇〇作戦も」「どれもわなだから」などの発言が出てきた場合は、「わな＝ひきょうなのか？」を問い返し、「そもそも思考」を引き出していく。
- 「そもそも」で考える中で、「誰目線で考えるかによって、ひきょうなのかどうかが変わる」のような発言が出てきた場合は、その発言の意味を全体に問い、考えの共有化を図る。
- 考えのずれが埋まらず、話し合いが平行線のままの際には、「どうしてこんなに考えがずれるんだろう？」と問いかけることで、「誰目線で考えるか…」のような、視点を変えると「ひきょう」の捉え方が変わることに気付けるようにする。新たな解決策が見えてきたところで、次のように投げかけて個々の見通しをもたせた上で、座談会に移る。

[最後の一言]をより深めるために、自分に必要な問いや解決策は？

- それぞれが座談会に取り組み始めたら、一人一人が何に立ち止まっているかを見取っていく。例えば「え～（悩んでいる状態）」「でも…（矛盾や考えのずれが生じている状態）」「だったら…（発展的思考が動き出した状態）」などの言葉や仕草、表情等を捉え、その状態を価値付けるとともに、必要に応じてテキストに立ち返らせたり、協働解決を促したりする。
- 今の自分は座談会録の[問いかけ・返答・最後の一言]のどれが書けそうかを問い、一人一人が自分の問いの解決状況を感覚的に捉えられるようにする。その上で、個々の活動へ戻し、自分の考えをまとめ直したり、必要に応じて座談会を続けたりできるようにする。
- 「①なぜ[問いかけ・返答・最後の一言]を選んだのか」「②現時点での納得度と次どうしたいか」について話す機会を設ける。その上で、国語日記を記述する時間を設け、感覚的に捉えていた自己の学習状況とそれに基づく学習調整について言語化できるようにする。その際、②の見通しをもてない子どもがいた場合は、全体で取り上げてどうすれば良いかをみんなで考えるように促したり、見通しをもっている子どもを価値付けてモデルになるようにしたりする。

【教材・教具】

- 人物・作者・読者カード
- 座談会シート

【評価】

各場面の叙述を比較・関連付けして問いを発展させたり、考えを再構成したりしている。（座談会録・国語日記）